

教育研究業績書

2017年05月29日

所属：教育学科

資格：教授

氏名：高井 弘弥

| | |
|--------------|-------------------------------|
| 研究分野 | 研究内容のキーワード |
| 発達心理学・特別支援教育 | 認知・社会性の発達と障害 |
| 学位 | 最終学歴 |
| 文学修士, 文学士 | 京都大学大学院 文学研究科 心理学専攻 博士課程 満期退学 |

| 教育上の能力に関する事項 | | |
|------------------------------|-----|----|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 教育方法の実践例 | | |
| | | |
| 2 作成した教科書、教材 | | |
| | | |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| | | |
| 4 その他 | | |
| | | |

| 職務上の実績に関する事項 | | |
|------------------------------|-----|----|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 資格、免許 | | |
| | | |
| 2 特許等 | | |
| | | |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| | | |
| 4 その他 | | |
| | | |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|---------|-----------|-------------------|---|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 1 著書 | | | | |
| 1. 〈私〉という謎 自我体験の心理学』 | 共 | 2004年 | 新曜社 | 発達心理学から見た自我体験 (pp. 195-213) 近年自我心理学および青年心理学の分野で取り上げられることが多くなってきた「自我体験ich-erlebniss」という現象について、発達心理学の立場から検討した。この現象の性質上主観的な報告に頼ることになりがちだが、規範の相対性の認識や自己意識・自己認知の相対的な視点の獲得などといった認知発達上の転換点とこの自我体験という現象が連関を持っている可能性を指摘し、今後の研究の方向を示唆した。 |
| 2. 子どもの発達心理学を学ぶ人のために (| 共 | 2003年 | 世界思想社 | 「第1部子ども理解の枠組み第2章発達の理論」(pp. 12-32)では、発達心理学において理論とはどのようなものか、なぜ理論が必要なのかを論じ、発達心理学を作り上げたいくつかの理論を紹介した。 「第2部何がどう発達するの第6章「自己」の発達」(pp. 151-170)では、自己意識の発達を認知発達上の転換期と関連させて考察し、その論拠となる先行研究を紹介した。 |
| 3. 『年齢の心理学—0歳から6歳まで』 | 共 | 2000年7月 | ミネルヴァ書房 | 0歳と1歳—発達と文化の接点 (pp. 25-62) 母親へのアンケート調査により、子どもが1歳になる前に持つイメージと1歳になった後での実感とを比較し、日誌記録による縦断データで、親の側の見方の変化を子どもがどう受け止めていくかについてみた。 (分担執筆者：岡本夏木・麻生武・海老沢由美他) |
| 4. 『子どもは認知やことばをどう育てるか—健常児・障害児に共通な発達機制—』 | 共 | 1996年11月 | 培風館 | 乳幼児期初期の人との関わり方の発達(pp. 81-89)執筆 乳児期の母子相互作用について、そのパターンが月齢によって変化するだけでなく、声によるやりとりと表情の模倣では異なることがわかった。このことは、その後の母子の、ことばによるコミュニケーションのパターンの萌芽がこの時期からあらわれることを示唆している。 (分担執筆者：井上幸・岩崎隆彦・大森千代美・岡美代子・片岡基明他) |
| 5. 講座『幼児の生活と教育』3個性 | 共 | 1994年6月 | 岩波書店 | 個性のあらわれ—ゼロ歳児から2歳児まで(pp. 195-2 |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|--|---------|-----------|-------------------------------|---|
| 1 著書 | | | | |
| と感情の発達 | | | | 12) 新生児期から2歳前後までの子どもが「その子らしさ」を出していく過程、そして親が「その子らしさ」を見いだしていく過程をまとめ、保健所等での発達カウンセリングでのしつけの問題や2歳児の反抗などについても論じた。(pp.195~212) (分担執筆者：野村庄吾・久保ゆかり・柏木恵子・矢野喜夫・松永あけみ他) |
| 2 学位論文 | | | | |
| 3 学術論文 | | | | |
| 1. 道徳判断における直感システムと推論システムの関連 | 単 | 2010年 | 武庫川女子大学大学院教育学研究論集第5号、p.27-32. | Haidt(2001)が提出した道徳の「社会的直感モデル」に基づき、道徳的ジレンマに対する回答を行う際に、道徳的直感による判断と合理的な推論による判断がどのように働くかを検討した。大学生を対象にした質問紙による調査の結果、短時間での回答を行った場合には道徳的直感に基づく判断が、時間をかけて回答した場合には合理的な推論による判断がなされていることが示された。ここから、道徳的直感と推論の二つのプロセスをどう統合して機能させることが有効か、という問題提起を行い、さらに、自閉スペクトラム障害の道徳判断を指導する上で、このような直感と推論の相補的な関連に注目することの重要性を示唆した。 |
| 2. 学習動機・達成動機と授業評価の関連-「やる気のある」学生からの授業評価を生かすために- | 単 | 2009年 | 武庫川女子大学大学院教育学研究論集第4号 | 大学生が授業評価をする上でどの項目を重視しているかとその学生の学習動機・達成動機との関連を調べた。その結果、学習動機・達成動機が高い学生ほど授業評価では内容を重視し、低い学生は授業の内容よりも形式(授業時間が守られているかなど)を重視していることがわかった。 |
| 3. 自閉症スペクトラム症候群における道徳規範の潜在学習と道徳感覚(1) | 単 | 2008年03月 | 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学) | 自閉症スペクトラム症候群の子どもたちで不得意とされる社会的規範・ルールの獲得について、潜在学習という観点から検討した。 |
| 4. 幼児の植物概念と目的論的思考-食用植物の栽培を通して- | 共 | 2007年12月 | 島根大学教育学部紀要(教育科学) | 大谷修司・相原泉・高井弘弥 幼児が科学的生命概念を獲得する上で重要だと考えられている植物栽培の経験について検討した。幼稚園5歳児で、半年間の食用植物の栽培を通じて、科学的生命概念、特に目的論的生命概念の獲得の過程を縦断的に考察した。 |
| 5. 道徳的違反と慣習的違反における罪悪感と恥の理解の分化過程 | 単 | 2004年 | 発達心理学研究 第15巻1号pp.2-12ページ | 道徳的・慣習的違反のあとに、謝罪や補償などの向社会的行動をとるか、それとも逃避などの非社会的行動をとるか、の推測に関して、罪悪感と恥の感情を媒介にして検討した。幼児ではどんな場合であっても違反に対しては罪悪感に媒介された向社会的行動をとると推測していたが、成人では慣習的違反の場合や道徳的違反でも軽微な場合など状況によっては恥の感情に媒介された非社会的行動をとることもあり得ると考え、その移行過程が小学生の時期に見られた。 |
| 6. 初期シンボル化過程における自己確定期の検討 | 共 | 1999年 | 心理学評論 第42巻1号 pp.23-34 | 音声と意味とが結びつく言語発達の初期の局面について、縦断的観察データを基に論じた。音声と意味とを結びつける内的な活動を想定して、以後の単語の獲得との関連を探った。 著者：高井弘弥・高井直美、共同研究につき本人担当部分抽出不可能) |
| 7. 「価値の内化」研究の転回 | 単 | 1998年 | 樟蔭女子短期大学紀要『文化研究』第12号pp.27-39 | 児童期において、道徳やルールといった規範がどのように獲得されるのか、という「内化」の問題についての最近の研究をレビューした。 |
| 8. 初期シンボルにおける身振り動作と音声言語との関係 | 共 | 1996年 | 発達心理学研究 第7巻1号pp.20-30 | ことばの発達の初期段階で、それまで用いていた身振り動作による表現が音声による表現にとってかわられる過程について、縦断的観察によるデータを基に論じた。ここから、身振り動作と音声とは拮抗する関係にあるのではなく、相補的な関係にあることも推測された。 (著者：高井直美・高井弘弥、共同研究につき本人担当部分抽出不可能) |
| その他 | | | | |
| 1. 学会ゲストスピーカー | | | | |
| 1. 人格と自我：1歳違えばどう違う？ | 共 | 1997年 | 日本発達心理学会第8回大会ミニシンポジウム | |
| 2. 学会発表 | | | | |
| 1. 道徳的アイデンティティと非道徳的行動に対する善悪判断の関係 | 共 | 2013年 | 日本感情心理学会第21回大会 | |
| 2. A Cross Cultural Comparison of | 共 | 2013年 | Japan-U.S. Teacher Ed | |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・ 共著書別 | 発行又は 発表の年月 | 発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称 | 概要 | |
|---|-------------|---------------|---|--|--|
| 2. 学会発表 | | | | | |
| Japanese and American Elementary and Middle-School Children's Attitudes and Behaviors Toward Academic and Social Issues | | | ucation Consortium(JUSTEC), 25th Meeting | | |
| 3. 新版K式発達検査：検査項目の意味を考える | 共 | 2011年 | 日本教育心理学会第53回大会 | 高井弘弥、大谷修司、楯原泉 幼児教育の中で広く行われている食用植物の栽培について、単に心情的・情緒的な発達についてではなく、科学的認識、特に植物の自己利益的目的と人間の自己利益との対立などについて、幼児がどのように認識していくのかを検討した。 | |
| 4. 統合保育下の子どもたちは障害児をどう受け止めているか-ドット法と半構造化面接による検討 | 共 | 2010年 | 日本特殊教育学会第48回大会 | | |
| 5. 幼児の植物概念と目的論的思考 | 共 | 2008年03月 | | | |
| 6. 発達障害児における罪悪感・恥の理解 | 共 | 2008年 | 日本教育心理学会第50回大会 | | |
| 7. 「うしろめたさ」の機能と構造 | 単 | 2004年 | 日本発達心理学会第15回大会 | | |
| 8. 子どもにおける逸脱行動・校社会的行動に対する認知と親の価値の継承(2) | 単 | 2002年 | 日本発達心理学会第13回大会 | | |
| 9. Situational antecedents and behavioral tendencies on moral and conventional transgressions: Developmental process of differentiating guilt and shame | 単 | 2002年 | The International Society for the Behavioral Development, 17th Biennial Meeting | | |
| 10. 1歳児における関係づけ行動の発達 | 共 | 1997年 | 日本発達心理学会第8回大会 | | |
| 11. 幼児期における他者の気持ちの理解と象徴遊び | 共 | 1996年 | 日本発達心理学会第7回大会 | | |
| 12. 幼児期初期における他者の気持ちの理解と一人会話 | 共 | 1995年 | 日本発達心理学会第6回大会 | | |
| 13. 1歳児の身振り動作と言語発達 | 共 | 1994年 | 日本発達心理学会第5回大会 | | |
| 14. 1歳児の対象を関係づける行動と言語発達 | 共 | 1991年 | 日本発達心理学会第2回大会 | | |
| 15. 図形認知の方向規制に関する発達の研究(1) | 共 | 1991年 | 日本発達心理学会第2回大会 | | |
| 3. 総説 | | | | | |
| 1. 佛教大学通信教育部テキスト『障害児心理』 | 共 | 1997年 | 佛教大学通信教育部 | | 精神薄弱の定義について通説をまとめ、さらにIQやその他の尺度にとられない新しい分類についても紹介し、小中学校での障害児担当教員にとって有用と思われる考え方を提示した。(pp. 53~63) |
| 4. 芸術(建築模型等含む)・スポーツ分野の業績 | | | | | |
| | | | | | |
| 5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等 | | | | | |
| | | | | | |
| 6. 研究費の取得状況 | | | | | |
| | | | | | |
| 学会及び社会における活動等 | | | | | |
| 年月日 | 事項 | | | | |
| | | | | | |